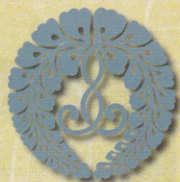


# WA!



No.5



## 危機管理

私は「危機管理」という言葉になんとなく違和感があった。ワイドショー等で取り上げられる度に、事件や事故・災害が起きてから批判しても仕方ないことではないかと感じていた。

そんな折、ある本の一文が目にとまった。いささか乱暴に文章を引用すると、「危機が起ったら大変だ。それなら平時にそれに対する準備しておく必要がある。それ自体は結構だが、まず危機の定義を考えてほしい。危機とは、そもそも管理できない状態をいう。それを「管理」するとはどういうことか」というくだりである。なるほどと感心しながら思いを巡らせていて、ふと不安になった。

しばしば、「私は普段から教えをよく聞いて、お念仏も称えますが、全く聞こうともしない人は、どうでしょうか」と尋ねられることがある。「人ごとではなく、自身の問題ですよ、いつか聞いて下さるときがありますよ」と答える一方で、心のなかでは「聞かない人はダメだな」と思っていた。そして、「いつ死んでも、お聴聞をして、お念仏しているのだから大丈夫」と、また、「いつ死ぬか、わかりませんよ、日ごろが大事ですよ」と、私はお念仏を危機管理の道具くらいにしか伝えていなかったのではないか。

大事なことは「命の危機に」備える念仏ではなく、「今、願われている」「今、救いの御手のなか」であるということを知らされるお念仏ということであった。いままで、子ども達に対しても、お寺に遠慮なく来て将来も何か関わりを持ってくれる人を育てるのが、少年教化だと思っていた。これからは、「共に今、願われていることを喜び、語り合える活動」に、思いを委ねて取り組んで行こうと思う。



## 総合・前期指導者学習会

平成十九年六月四日、広島別院にて、総会並びに前期指導者学習会が開催され、総会にて各議案が承認されました。

第四十回報恩講子ども大会の実行委員長には推進委員から米田順昭（佐伯奥組・最禪寺）委員が任命され開催日も十月二十日（土）と決まりました。

続いて学習会の中では北豊教区人形劇団「劇団ほっぼ」による人形劇の実演を鑑賞しました。

この誌面にて蔵田聡代表の人形劇への想いを紹介します。

## 「想像・創造」

思えば五年程前、北豊教区前少年連盟委員長長の「人形劇団を作りたい！」という強い思いから、経験者として招集されたのが始まりでした。経験者といっても、ちょっとかじったくらいで、一から作り上げたことなどありません。脚本も舞台も人形も何もない、まったくゼロからのスタートでした。

途方に暮れていた時に、隣の大分教区が人形劇をしているという話を聞き、薬をもすがの思いで連絡を取り、いろいろとアドバイスをいただきました。そのお陰で方向性も何とか定まり、試行錯誤しながら一年以上の製作期間を経て、ようやく最初の作品が完成しました。

しかし実際に演じてみると、人形が大きすぎて重く操作しづらいし、舞台は背景もカーテンもなく淋しい物。脚本は面白くないし、演技はヘタクソ。子ども達にちつとも受けませんでした。今思い出しても恥ずかしいばかりでした。とてもあれなんとか形はできませんでした。その後はいろんなことを少しずつ改良しながら、試行錯誤を繰り返して現在に至っています。

何よりも頭の中で考えるばかりでなく、行動してみないと始まらないということでしょう。失敗や、回り道もたくさんしてきました。いろいろな材料を買って時間をかけて作ったのに結局使わなかつ



た道具などもあります。でもそのひとつひとつが決して無駄にはなっていないと思っています。

大事なのは、どういう作品を作りたいか、どういう事ができるのかを想像する力と、それを形にしていける創造する力です。この「想像力」と「創造力」を持って、創意工夫しながら少しずつも前に進んでいければ良いと思います。

とにかくできることから始めてみてください。安芸教区に素晴らしい人形劇団が誕生することを期待しています。

北豊教区人形劇団

合掌

「劇団ほっぼ」代表 蔵田聡



来たる10月20日（土）

## 第40回

報恩講子ども大会  
開催





## 「スライムを作ろう！」

昔、「スライム」というおもちゃがあったのを覚えていませんか？緑色のプロブヨとした塊で、触ると冷たくなんともいえない感触があった不思議なおもちゃです。

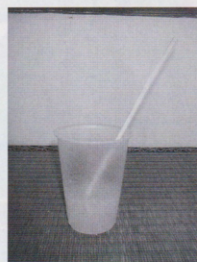
あのスライムがちょっとした材料で、簡単に作ることができます。子どもたちもきっと大喜び！ぜひ日曜学校等で作ってみてください！

### 【用意するもの】

水、ホウ砂（しゃ）、せんたくのり（PVA 配合のもの）、絵の具（黄緑、赤、青等）、ペットボトル、プラコップ、割りばし

### 【作り方】

- (1) まずペットボトルに半分位水を入れて、ホウ砂を溶かし飽和水溶液を作ります。
- (2) プラコップの4分の1くらいに水をいれます。（色をつけたい時はあらかじめ水に絵の具を溶かし色をつけておきます）
- (3) プラコップに水と同量のせんたくのりをいれてよくかきまぜます。
- (4) プラコップに、ホウ砂の水溶液をペットボトルのキャップ一杯分くらいを入れて、割りばしを使い素早くかきまぜます。
- (5) 固まって来たらそれを取り出して、両手を使ってキャッチボールのようにいったりきたりさせて、水気をきります。
- (6) 水気がとれたらできあがりです！



### 【Hint!】

- ・水に色をつけると固まり方が変わり難くなるので、最初は色をつけずに行ってみてください。
- ・ホウ砂水のペットボトルはラベルをはがして、「魔法の水」などと書いておくと一層子ども達の興味をひきます。
- ・ホウ砂水の量によって固まり方が変わってくるので、その量の感覚をつかむため、指導者はあらかじめ事前に試してみてください。
- ・ホウ砂はぬるま湯で溶かすとよく溶けます。
- ・ホウ砂の飽和水溶液をプラコップに入れてかき混ぜた時に、混ざらなかった水を素早く捨てると上手できます。



### 【注意点】

- ・ホウ砂は眼科用の薬で薬局で手に入ります。毒性があるので（5g～10gの摂取で激しい嘔吐や下痢を起こす）ホウ砂やホウ砂水の管理には十分注意して下さい。
- ・スライムを口の中には絶対にいれない事を徹底して下さい。
- ・スライムの一部分が下に落ちると固まってなかなか取れなくなってしまう、後で掃除が大変になるので、室内で行う時は下に新聞紙などをしっかりひくか、屋外で行う事をおすすめします。





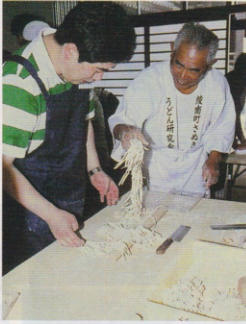
## 中・四国ブロック指導者研修会

平成十九年六月二十七～二十八日

少年連盟では毎年ブロック内の五教区がもちまわって研修会を開いています。今年も塩屋別院（丸亀市）にて開催されました。

四州教区担当のもと研修会では初日に講演、二日目はご当地自慢のうどんを打つ体験学習でした。講師は長島得乗（兵庫教区）先生でした。日曜学校沿革史の編集を中心にされた方です。「沿革史から何を学ぶか」をテーマに日曜学校の今後のあり方についてお話をされました。

二日目はうどん打ちです。参加者全員がエプロン姿になり、あらかじめ用意してくださった材料をまぜたりこねたりしました。まぜるのはやさしく、こねるのは力強く、けっこう難しいものだと思います。四～五人のグループに一人地元綾川町さぬきうどん研修会の会員の方がいっしょについてくださりました。



の指導を受けとても楽しかったです。こねたうどんを自分たちで丁寧に切った後、湯でいただきました。ちゃんとできていたか不安な気持ちで、昼食としていただきました。なんと、とってもおいしかったです。みんな満足そうでした。

さていよいよ次回は安芸教区が担当でこの中四国ブロック指導者研修会が開催されます。具体的なことは推進委員と事務局でまだ検討中ですが、何かご要望がありましたら事務局までご連絡ください。

安芸教区のみならずブロック内の方々とのいろいろな意見交換の場であり、少年教化という大きな課題を共有している仲間とぜひ語り合いたいものです。詳細が決まりましたらご案内いたします。安芸教区のみなさまのたくさんのご参加お待ちしております。

## コラム

### 江戸時代のさまざまな親たち

昨年十月、往来物研究家小泉吉永氏の「知るを楽しむ 歴史に好奇心」江戸の教育に学ぶ（NHK教育）の放送はとて興味深かった。

往来物とは、寺子屋などで使用された初歩教科書である。そして、小泉氏は往来物をおとして江戸時代の教育や子育てについて興味深い研究をされている。その子育ての一端を紹介したい。

江戸時代の子育ては、生みの親だけが親ではなく、様々な方が親となっている。例えば、仮親となる「取り上げ婆」は「産婆」をはじめ、生まれてすぐに乳を飲ませた「乳付（ちづ）け親」「乳親」「名付け親」、長崎のカトリック教徒では天主堂に赤子を連れて行く「抱き親」、

病弱な子どもの後見役である「拾い親」、成人までの通過儀礼にも、男女の成年式であるへこ祝いの「襷親」「へこや」「回し親」、男子が前髪を落とす際の「前髪親」、武家なら元服時の「烏帽子親」「えぼしおや」「元服親」「具足親（鎧親）」「よしいおや」、女子七歳の帯解きに立ち会う「帯親」、女子成人の際の「お歯黒親（鉄漿親）かねおや」・筆親「毛抜親」、

婚礼の際の「杯親」「さかずきおや」（仲人親）など、人生の節目にいろいろな

仮親との絆ができ、その関係は一生続いたそうである。

今あげた仮親たち以外に子どもの成長を育むのは「こども組」「若者組」「娘組」など同世代が集まる自治組織での共同生活である。年中行事や祭礼、警備・消防など一定の役割を果たし、これらの組織にいったん所属すると、親や大人が容易に口出しすることができないほどであった。特に若者組では「子ども心」を完全にぬぐい去って自立した大人になるための厳しい修行があり、組織内の事柄は一切口外しないのが掟であった。

江戸時代の子どもの扱いは、大人の仲間入りをするまでの間、様々な人々との重層的な関係や集団の中で育てられたのであり、そこには、大勢の人間が深く関わって一人の子どもの育て上げていく、網の目のような教育システムがあった。

地域によって独自性があったのである。うが、生みの親だけではなく、みんな子どもを育てることが当たり前だったようである。

● 上の少年連盟への情報やニュースを募集いたします。（教務所 kyokuk@akr.or.jp まで）